



【西村直之氏】略歴

精神科医・日本精神神経学会認定専門医
平成2年 琉球大学医学部卒業、平成7年 医学博士取得(臨床精神薬理)。医療法人精明会系漢明病院アルコール病棟、国立脳前療養所(アルコール・薬物依存病棟)などに勤務。平成11年 医療法人卯の会あらかきクリニック院長。平成18年4月 リカバリーサポート・ネットワークを立ち上げ代表者を務める。平成21年10月 NPO法人化に伴い、代表理事に就任。薬物依存回復支援施設ダルク、強迫性障害回復支援施設ワンダーボートの支援など草の根的に行き。平成10年～14年 厚生労働省地域研究の研究員(薬物依存)、龍谷大学矯正・保護総合センター研究員。平成19年～ 厚生労働省省域研究の研究員(いわゆるギャンブル依存)

第34回PCSA経営勉強会

「パチンコ依存問題

電話相談の現場から」

一般社団法人パチンコ・チェーンストア協会(加藤英則代表理事/略称・PCSA)は8月19日、第34回PCSA経営勉強会を銀座フェニックスプラザ(中央区銀座)において開催した。その第一部として、特定非営利活動法人リカバリーサポート・ネットワ

ーク(RSN)の代表である西村直之氏を招いた。「パチンコ依存問題 電話相談の現場から」と題して、セミナーを開催した。PCSA有志として、本年3月11日、沖縄にあるRSNの現場視察をおこなった経緯があり、今回、RSN設立経緯を含め、

こういった活動をおこなっているのかについて、西村代表から直接説明を受けた。

◇セミナー「パチンコ依存問題 電話相談の現場から」
特定非営利活動法人リカバリーサポ

ート・ネットワーク(RSN)
代表・西村直之氏

○リカバリーサポート・ネットワークの設立経緯
子どもの車内放置事故・熱中死事故、借金問題など、パチンコの周囲

で生じる問題に対し、パチンコホール経営者の全国組織である全日本遊技事業協同組合連合会(略称・全日遊連)は、2003年4月に「依存症研究会」を設立した。
研究会現在、パチンコ依存問題研究会」

パチンコ業界自らが、これらの問

題の背景の一因となるパチンコ依存問題について何とか対応したいというところからスタート。この研究会では、強迫的ギャンブルの回復支援施設「ワンデーポート」から当事者活動の考えを聴くなど、広い視点からパチンコ業界として具体的に何ができるか議論と検討をおこなったようです。

この「ワンデーポート」の中村氏と知り合いであった私は、この依存問題について、(精神科医といふ)第三者的な立場から、どういった対応が望ましいか、相談を受けたのが、RSN設立に関わるきっかけだった。

私は、精神科医として、特にアルコール・薬物依存の問題に関わっていたところから、パチンコ依存問題について、どうすればよいかと問われ、「まず、今何がおこっているか、それがわからなければ、何もできない」と助言した。

私が危惧していたのは、何かかわらない、とにかく問題が起こっているというような時、とかく世の中としては、因果関係を調べたりすることなく、一番問題と思われるところを、まず何とかしようという風潮がある。当時においては、パチンコ業



沖繩のRSN事務所(写真は3月視察訪問のもの)

「是非この問題について、お願いしたい」ということになり、2006年4月RSN開設電話相談開始という駆け足で準備となった。

界は30兆円産業という巨大な規模であり、のめり込みが起ころのは、この業界に問題があるからというような考え方になってしまい、本当のことは、手つかずでウヤムヤになってしまうという心配があった。

のめり込みの問題について、根拠なくパチンコが悪いという一方的な見方だけが進むもの。社会問題化だけを騒ぎ、指弾だけして、結局は、本当の問題解決については何も対処されないということになってはいけません。果ては、のめり込む当事者が悪いといった自己責任で済ましてしまおう。

当時、こののめり込みの対応の仕方について相談を受けた時「まずは、直接に当事者の声を聞くこと。そしてなるべくこの問題について、多くの声を拾い集めること。それによって、今、のめり込みがどういうことになっているのかを把握して、どうすればよいかを考え、対応することが大切」と申し上げた。それが2004年の12月、相談期間設立案を提示して、私がこの問題と関わる最初

その時は、アドバイスだけで、理想とする対応案を申し上げるというだけであったが、そうこうする内に、「是非この問題について、お願いしたい」ということになり、2006年4月RSN開設電話相談開始という駆け足で準備となった。

やがて2009年10月には、特定非営利活動法人認証を受けて、名実ともにパチンコ依存問題についての相談機関として活動に努めている。

この設立経緯について、私自身、これまででない取り組みであると自覚している。それは、当事者ともいえるパチンコ業界自らが、その依存問題について、真正面から向き合い、何とかしようという事で踏み込み、立ち上がったという意義ある出来事。これまでの国内産業において前例のないこと。

たとえばアルコール業界において、健康飲酒に関する啓発活動は積極的だが、アルコール依存症についての直接の相談機関、取り組みの事例はない。製薬業界においても、薬物依存への取り組みはない。業界自らがリスクマネジメントとして対応するというのは、パチンコ業界が最初たる。その意味においても、関わったひとりとして、責任の重さを痛感している。

○事業内容

リカバリーサポート・ネットワークの主な活動は、「電話相談」・IP(アイピー)電話を使い、その為、全国どこから電話をしても、通話料は安いというのが特徴(IP電話とはインターネットを活用した電話サービス。そして、今までは通話料が気になる長距離通話を、格安料金化、あるいは無料化を可能にした)。

当時、急いで相談対応を開設しなければいけない、活動資金が限られていて、なるべくローコストでできるものという実情だった。ただし、そのことから、このIP電話を使ったローコストな相談機関は、全国にも類をみない相談ラインの最初の活

動のようだ。開設当時、システム提供側のNTTの関係者でさえ、そういう使い方は前例がないという、やりとりが思いだされる。

実際の電話相談、匿名で電話を受けるというもの。そして、その相談者の住む場所に近い、相談内容に適切と思われる地域の機関につなげるというのが主な流れにしている。この最寄りの機関は「地域の社会資源」と呼ぶことができる。今一番足りない機関でもある。たとえば、パチンコののめり込みの問題について、相談を申し出ても、門前払いというケースがまだ今でも少なからずあるという事。そうしたことから、電話相談を受ける一方で、地域の「援助職者・サポーター養成」に力を入れている。

その他、「広報・啓発」「学術研究関連」では、厚生労働省班研究、自殺対策事業等への協力、「支援・連携」としてギャンブル依存問題回復支援施設ワンデーポート、アルコール・薬物依存回復支援施設マック・DAR(ダルク)など、自助グループとの連携、問題を抱えている当事者の方の声に耳を傾ける事に気を配っている。

依存問題については、諸外国の対応と比べると、30年位対策が遅れていると感じる。RSNの活動を通じて、連携ができたと感じているが、それでも「医者の数」「福祉の支援」「依存問題に対する地域の理解」など、まだまだ道半ばである。また全国には数多く自助グループの活動があるが、乏しい活動資金の現実があり、機会があれば、理解と協力を

○電話相談事業

総相談件数 4327件(平成18年4月から平成22年3月まで)
相談件数 1305件(平成21年4月～平成22年3月・月平均108.8件)

初回相談 86%(複数回14%)
活動を始めて4年間で4327件の相談。月平均では、100件ほどの電話相談状況。最近、7月、8月と100件を割る状況にある。おそらく、6月から施行した改正貸金業法の影響かもしれない。

4年間の月間周期で、電話相談は、秋口から冬場にかけて減少傾向がある。またホール店舗での稼働が下がると、電話相談も下がるとい傾向があるようだ。現在、総相談件数について、データベースの再構築をおこなっている。

○チラシの活用

RSNの主たる事業は、パチンコ・パチスロへの過度ののめり込み(依存問題)に特化した電話相談。その電話の多くはRSNの電話番号を記したA4サイズのチラシを通してかかってきている。そのチラシは、全日遊連傘下ホール店舗に備え付けられたもの。

RSNの活動が主であってはならないというのが、初心。私たちが頑張っている活動しているというのをアピールするならば、全国規模で広告なり、折り込み、あるいはCMを流してもらおうほうが、数も一度に集まり、存在を内外に訴えることができ合理的かもしれない。しかし、私たちの活動は、のめり込みの問題をかかえた当事者の方の声をリサーチしていくことが目的。対応を議論している中、ホールの中で、冷静になれる場所はどこか。トイレだろう。大きな



ポスターでは逆に見えないかもしれない。チラシ(A4サイズ)なら、置き場所を選ばない、ということ、当事者の方に直接届く方策として、このA4のチラシが作成されることになった。

○本人からの相談が多い

その甲斐あって、電話相談の件数の中、本人2408件、全体の56%と大きな比率となっている。通常は、依存関連問題の相談は、周囲(家族など)からの方が多い。お金を、内緒で借りていたり、仕事あるいは学校に行っていない、トラブルになっている

るといようなケースが多く、当事者は隠していたり、認めたくないもの。薬物、あるいはアルコール依存のケースにおいては、状況も異なる。たとえば、医師からアルコールを控える、あるいは止めるよう言われている方。同じくタバコも控える、止めるよう言われている方、いないだろうか。「悪いのはわかっていて、人にとにかく言われたくない、自分から言いたくない」といった気持ちは理解できるのではないだろうか。医師の中でも、自身がそうした健康状態である場合、無関心を装うケースが多いもの。そうした点からみると、RSNの電話相談の全体の6割近くが当事者・本人であるというデータは驚くべき数字。普通は、1割位のもの。

現在では、うつ病対策として、当事者に直接投げかける取り組みがある位。アルコール依存において、居酒屋のトイレに「あなたは飲みすぎではありませんか」というポスター、酒店に「あなたの飲酒は度を超過していませんか」というポスターは見たことがないと思う。

こうしたことから、本人(当事者)からの相談が主体というケースは、前例のないものだと思う。諸外国においても数少ない例だと思う。

より多くのパチンコ店にRSNの相談先がわかる電話番号が載ったチラシを貼ったり、置いていただき、今後ともご協力をお願いしたい。というのも、RSNの存在を知って、電話相談につながった本人の情報源として、全体の68%は、「ホール内ポスター」だった。新聞にRSNの活動が載ると、家族など周囲からの相談が増える傾向。最近では、インタ

ーネット(検索機能・リンク・パネル等)を通して、相談につながるケースも増えてきている。

○30歳代を中心とした問題層

具体的な相談をいただいた中、年齢層でみていくと、30歳代が多い分布となっている。ホールに遊びに来られている年齢層の分布と、相談者の分布とは似ていると思われる。データ的には、実際の参加年齢の分布と、問題を抱えている分布とは、タイムラグがある方が望ましい形であるべき。それは、実態と同じ分布と似ている形、問題が発生するのが短期間ということになる。

アルコール依存の場合であれば、問題が顕在化するのには、男性の場合、飲み始めて10年位。女性の場合は、5年位と言われている。その例からみると、パチンコ相談の場合からみると、短期間に問題ができていくと見ることが出来る。

若い年齢層の方に遊技を提供する場合、注意していただきたい。海外のデータからでは、ゲーミングマシン(スロットマシンなど)では、依存問題は男女差がないというデータ結果もある。

また、相談者自身も、どうすればよいか、わからないということが問題。これは、相談を始めて時間が経過するにつれて、相談を受ける我々も気づき始めたことだが、「パチンコのめり込みは、ギャンブル依存症と呼ぶべきではない」という課題として、今後突き詰めることになるかもしれない。

「パチンコの依存者は、社会が持ついわゆるギャンブル狂は少ないのではないのか？」

これは、電話相談をされる方々は、普通の方々ばかりであり、別に生活を踏み外した特徴的なタイプの人は稀であるという点。非常にまじめに社会生活を送っており、ただ、ちょっと、のめり込みによって、少し問題が膨らみ、対処に困っているという印象を受ける。

「若年者・女性、高齢者など集団によって、生じる問題とリスクが異なる可能性がある」という点では、遊技を提供される方々に「誰に何を提示していくのかという事」ももう少し

パチンコの依存問題に関して電話相談を始めたところから、どういった内容の相談が寄せられるか予想がつかなかった。実際に、4年余が経過した経験からは、相談者は真面目な相談が多いという特徴。

①やめさせざる方法/2589件②地域の相談先/545件③その他/298件④家族の接し方/509件⑤借金の返済方法/141件、など。

こうした相談に対して、その相談者の地元(地域)機関に対応してもら

えるよう連携をおこなっている。少しずつではあるが、その社会資源の広がりも進んできている。その中で多いものは、ギャンブラーズ・アノニマス、県精神保健福祉センター、ギャンノン、ワンデーポート、医療機関、市精神保健福祉センターなど。

○電話相談から見えてきたこと

「ユーザー・家族は、相談窓口がわからず困っている」

これまで、のめり込みの問題を他の機会として経験したことがある方は、相談者の3割位しかいないというところ。これは、深刻であり、どこに相談してよいかわからないということ。

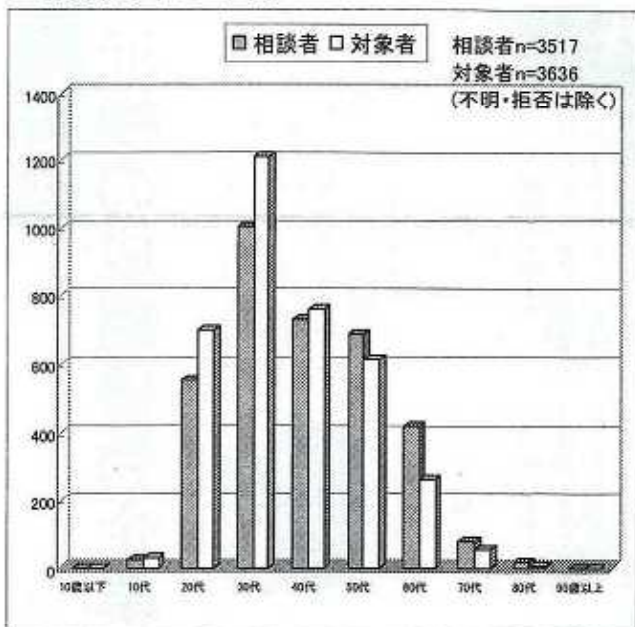
また、相談者自身も、どうすればよいか、わからないということが問題。これは、相談を始めて時間が経過するにつれて、相談を受ける我々も気づき始めたことだが、「パチンコのめり込みは、ギャンブル依存症と呼ぶべきではない」という課題として、今後突き詰めることになるかもしれない。

「パチンコの依存者は、社会が持ついわゆるギャンブル狂は少ないのではないのか？」

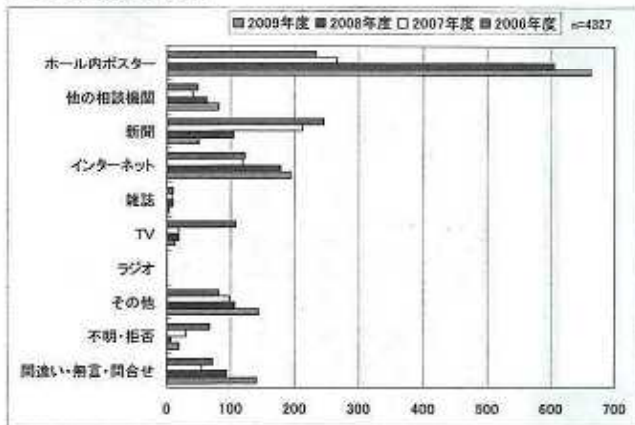
これは、電話相談をされる方々は、普通の方々ばかりであり、別に生活を踏み外した特徴的なタイプの人は稀であるという点。非常にまじめに社会生活を送っており、ただ、ちょっと、のめり込みによって、少し問題が膨らみ、対処に困っているという印象を受ける。

「若年者・女性、高齢者など集団によって、生じる問題とリスクが異なる可能性がある」という点では、遊技を提供される方々に「誰に何を提示していくのかという事」ももう少し

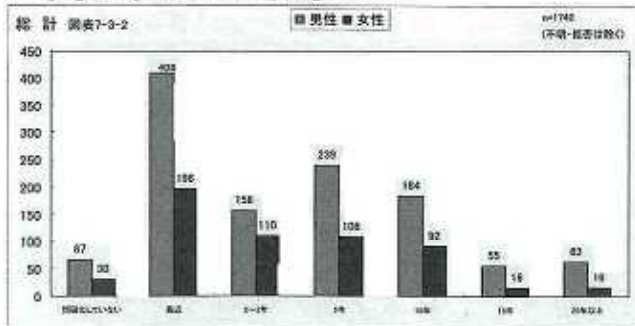
■相談者の年齢



■相談経路



■問題化した時期



し考えていただきたい。
「低額貸し玉の広がり、依存問題は変化するか」という点は、相談が多少減ってきているが、それは、いわゆる「パチンコ」などの低射幸性の普及、あるいは改正貸金業法の影響があるように思っている。
○パチンコへのめり込み
アルコール依存症という分類では、「アルコール依存症(5%)」、「問題飲酒(20%)、危険の低い飲酒(35%)」、「非飲酒」というような形で理解されているのが一般的。しかし、ギャンブル依存というものは、まだかくとした分類がなされていない。のめり込みの問題において、世間では、「ギャンブル依存症」とか呼ぶべきか、本当はどうかはわかっていない。世界各国でデータ的な統計資料があり、それで推計すると、1〜2%は、病的ギャンブラー(いわゆる依存症が

あると推定されている。たとえば、パチンコファン参加人口が1700万人と仮定して、1%いるとして17万人は生活が破たんしていることになる。この数値(当事者とその家族など)を考えると、見過ごせない数になる。
社会問題化するということにおいて、何が一番問題かというと、「問題をかかえた」人よりも、「危険の低いユーザー」の行動が問題になっていると思われる。それは、アルコール問題が取りざたされる時、「危険の低い飲酒」の層の問題行動から発生する場が多い。たとえば「飲酒運転」「イッキ飲み」などの事故。若い人、飲酒に慣れていない人が、学習しないままに勢いで陥ってしまうというケースが多い。依存症の人が問題を起こした訳ではない。
その意味において、20代30代のま

だ慣れていない年齢層に対して、射幸性の高い遊技をイッキに提供した場合は、問題がおこらないわけがないだろう。そうした点では、遊技経験を積んだ人と少ない人とは、選ぶべき(ふさわしい)遊技機が違っていているということも想定される。遊技の経験を10年、20年と積んで、その間に問題がない人は、のめり込みは起きないとも言える。ピギナー段階で問題が発生しやすい、となると、その背景には、アルコール依存などの分類とは違って、初心者に問題行動が出やすいというのは、本来論議されている「依存症」とは、呼べないのではないだろうか。
人は、成人し、いわゆる社会人として、現代社会において、さまざまなストレスを抱えていかなければならない。のめり込みを抱えてしまう人の多くは、社会になじめない、対

人関係に問題をかかえているという兆候がある。ひきこもりまでは至らないが、20代30代では、乗り越えなければいけない時期と重なる。その時に、女性では母親になっても精神的に未成熟だと、車内放置ということも起こりうる。
○パチンコへのめり込む人たち
金を使い込み遊興、パチンコ「など」に使ったとか、強盗事件で、パチンコ「など」で借金をした、といったニュースがよく見かけるが、相談電話の内訳を見ると、全体の1割(410件)の相談者しか、公営ギャンブル全般を含めた割合でしかない。その他の9割強(3976件)は、パチンコだけしかない相談者という実態がみられる。問題行動を起こす人の多くは、「パチンコなど」と書かれる訳だが、その事件の実際は、パチンコももちろんだろうが、ギャンブル

ル全般に入れあげ、当然、生活に異常をきたしてしまつた一部の人のいうことがうかがえる。多くの相談者の方は、ほとんどがパチンコに特化しており、もし事件を起こしたのなら、「など」はつかないと推察される。
「年齢・性別による違い」において、男性は、10代20代から始める比率が高い。しかし、女性の場合は、40代50代になってからでも始められるようだ。その年代では、ウツとかいろいろな問題も出てくる頃であり、のめり込みにもつながるのかもしれない。
私が「RSN」を通じて電話相談から見えてくる「パチンコ業界」の姿というものは、それまでとは違うものとして感じている。パチンコ遊技を通じて、様々な社会問題が発生しているというようなマイナスイメージがあった。しかし、電話相談を通して、パチンコを通してのめり込みの相談をされてくる方々の声からの業界のイメージは、正反対であった。この電話相談は、純粋な業界のいちデータとして、これからも地道に積み重ねていければと思う。
○パチンコホールとは
若者からお年寄りまで、さびしい人、疲れた人、ストレスが溜まった人、辛い事をひと時忘れたい人、明日のために気分をリセットしたい人、たくさんの人たちがひと時座って行く「場所」。パチンコは日本にとって、大きな財産「地域福祉の重要な社会資源」だと思ふ。
目下、相談データの整備を急ピッチで進めており、今後、皆さまの参考にしていただけるよう、取り組んでおり、ご活用いただければ幸い。